



今昔の感一しお

ら生とて もるやが

# 今昔の感一しお

この期の者は本校創立に際して或る私立の旧制中学から氣の合った者同志の集団転入学や、私立中学から新天地を目指して乗り込んで来たといった感じで、植民地的雰囲気が漂つてゐた。また教員は大学教授が多く年輩の先生方で、生徒は孫みたいなもので伸び伸びと育つていたようである。服装は乱れ、煙草を吸う者があっても特に注意もなく大学生並みであった。若手の私一人だけが注意しても余り効き目はなかった。これは「生徒心得」なるものも明文化されたものが無かつたからである。この状態は昭和二十五年現校長の上野先生が大学庶務課長から本校へ転任されるまで続いた。この年の四月には新入生六十五名を迎える、二年、三年生と揃い生徒数は全校で二百五十余名となり、小規模とは云え一応良くなつた。

慎重な審議がなされたものである。本校生徒心得が、初めて活版印刷で配布されたのは昭和二十八年四月一日であった。内容は十七頁で冒頭に般若心経があり、生徒心得、生徒会規約（校友会規約を含む）が掲載されたものであった。校友会には文化部に演劇部、書道部、弁論部、文芸部、珠算部、英語部があり、体育部に野球部、陸上競技部、庭球部、卓球部、馬術部があった。大学構内に同居しているため、校友会活動も大學生と密接な関係にあった。野球部などは当時の運動場で一緒に練習したものである。一緒と言つても、放課後大学の練習時には球拾いで、大學の練習が終つてからでは大変な苦勞であった。大学の野球部も二部上位で一部目指して苦難の時代ではあつたが、良く面倒を見て貰つたもの

一期生百十六名が誕生したのである。そしていよいよ小規模ながらも軌道に乗ったやに思われた矢先、昭和二十七年二月二十一日午後四時十五分頃出火し校舎の大半を焼失してしまった。この年の全校生徒数は、三学年、三学級で百三十余名であった。そこで現在の大学正門の右側にあるモルタル二階建の校舎（当時は木造二階建の四教室であった）に移転した。この校舎は前にもまして老朽化がひどく、毎年の志願数が激減し、入学者も三十余名宛で三学年は通常の学校という形態から外れ、三学級で百名余りという状態が昭和三十年度まで続いたのである。これ生徒たちの心境としては淋しさがあつたろうが、少人数であつたればこそ、一人一人の生徒を全部の先生方で細かに観察でき行動、特徴なども

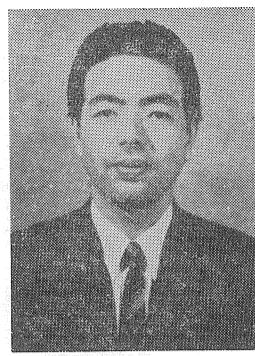
に建設され同三十六年まで観客を隼めて繁盛した。「降って湧いたよう」に」ということは、駒沢公園を作る前提のもとに起伏の多い広大なゴルフ場跡を平坦にし、假りの野球場が出来たからである。当時は客寄せのためこの野球場から、その頃流行のウエスタン・ミュージックが悠長に流れ、いかにも平和ムードの中授業を受ける生徒たちは、いい気分であったようである。このように恵まれた環境ではあったが、小規模になつた学校で、これ以上生徒数をふやせぬ悩みがあり、私にはこの平和ムードも退屈的で、焦燥感としか受け取れなかつた。当時は大学生もその数が少なく、最も疲弊した時代で高校が少なく、渋谷へ行けば生徒は集まらぬ。駒沢のこととて「悪影響がある」、その葛藤に苦しめられた。しかし遂に背に腹は替えられず、渋谷へ移転に踏切つた。これとてこの間に、一年度の募生は渋谷移転の前提で行なわれた。入学志願者は二百名を越え、百五十余名を選抜することが出来た。この年、三年一学級三十一名、二年一学級三十五名、一年三学級百五十五名と記憶している。

この年から本校の生活指導体制は更に強化されたのであった。これを受けたものと言えよう。この一年生は、本校の教育方針に添えない、所謂生徒心得を守れない者や、学業成績の振わない者は、やむなく退学させられた。二年時には六十名ずつの二学級となり、無事卒業出来た者九十七名という状態であった（転人生徒もあったのでこの年の卒業生は百九十六名であった）。以上の事実からいって、その指導が厳しかったかが伺えよう。これから毎年生徒数が増加し、渋谷分校も鉄筋四階建校舎を鍵の手に増築した。しかしどんどん生徒数がふえ、遂に昭和三十七年四月には駒沢大学内に高校校舎として鉄筋五階建を新築して移転したのである。大学生との同居生活でも昔程のことではなかつたようである。生徒急増にて生活指導の係も人員をふやして活躍した。所が大学生もその激増によって生活指導の現在地に転出し、更に今後の発展が望まれる。校舎は鉄筋四階建収容力二千名は充分である。生活指導の体制も各学級担任が受持つという理想的なもので、その効果が期待される。本校も二十二周年を迎えるまでに至つた。その記念誌を発刊するということであるが全く喜ばしい次第である。

卒業生、在校生、それに教職員が一致して、この記念事業を完成されることを祈り、これが本校にとって、発展の礎石であることを確信している。（本校教諭）

同窓生 実正・神谷道倫・佐藤正・池田忠夫先生

会長（一期）秋山彰三、副会長（一期）石田一男、（三期）関田喬、庶務（二期）百瀬博、（四期）田上太秀、会計（一期）三木太郎、（一期）浦敏之、会計監査（一期）原正男、（三期）橋本信義、幹事（一期）市川道太郎、（二期）菅原信昭、（三期）浦山黎一、坂井良寛、（四期）後藤定夫、坂井茂、（五期）真田治彦、（八期）浜田好晃、（九期）永瀬嘉平、上田栢生、沢野啓司、（十期）前田好昭、閑根正晴、古野耕二、（十一期）美原清、篠崎守雄、近藤幸二、（十二期）布能弘道、山口隆司、小島秀行、大林成幸、江川達雄、（十三期）田中護礼、浦敏之、熊谷徳博、加賀美正義、（十四期）渋井正一、鈴木直之、鎌滝紀男、（十五期）大沼孝信、松原秀和、伊藤章、鈴木順三、宮田利徳、（十六期）井上義昭、前田安俊、齊藤富・長富優・佐野賢・岩谷松太郎・五十嵐光雄・堤義明・吉村康宏・松浦立夫・川島浩・児島正竜・戸耕一・妻倉由明・（十七期）河合俊男・守友円太郎・杉景光・浅賀治郎・井上茂・飯田一郎・臼井誠一・今井繁栄・（十八期）佐藤武夫・吉清隆・小熊孝章・前田光俊・竹中明・田中耕司・吉原伸記・横尾悟朗・山県好明・吉田光、



# 駒大高の「このごろ」 —その便りに代えて—

三木太郎

つまり現在高校在籍者は五四万一千〇〇名(A)であるが、中学在籍者は三九万七六六二名(B)にすぎないから、(B)が九割高校に進学し、一割が他県から流入すると仮定すれば、四年には高校在籍者の数は(A)から(B)を引いた数つまり一四万三四三八名減ることになる。四年以降は(C)の七九万一三三〇名に示されている。

このごろ、学内はなにかとせわしい。ひとつは生徒募集のこと。ひとつは二〇周年記念事業のことである。

昭和二三年の新学制下に大学予科を母胎に発足した本校は、そのち必ずしも順調な歩みをつづけたとはいえないが、当局をはじめ、教職員・P.T.A.・同窓生・在校生の一丸となつた努力によつて、曲折を経ながらも次第にその存在意義を高め、三八年には、駒沢大学敷地内に増新築された新校舎に二二〇〇名余を数えるほどに成長発展を遂げた。しかし、本校が一時期これほどまでに成長発展した背景には、高校進学者の絶体数の増加という社会的条件があつたことは無視できない。事実、このほどは、以前にも増した教職員の努力にもかかわらず、生徒数は漸減し、四二年度現在では、用賀の新校舎(延べ二〇〇〇坪、講堂兼体育館・坐禅堂・柔剣道場付設)にあって、三年五四七名(三月五日を以つて卒業)、二年四一九名、一年三五七名の計一、三二三名を擁するにとどまっている。そして、高校進学者の絶体数は今後もさらに減少して四五五年までつづき、それ以降に至つてもさしたる回復は期待できない。実情にあることは表1に明白である。

(表1)  
42年5月1日現在高・中・小在籍者

都内公立高等学校在籍者	201,254名
〃 国立	4,160名
〃 私立	335,686名
計	541,100名
都内公立小学 在籍者	340,262名
〃 国立	3,812名
〃 私立	53,588名
計	397,662名
都内公立中学 在籍者	763,586名
〃 国立	4,663名
〃 私立	23,181名
計	791,330名

東京都教育委員会監修「東京都学校名簿・昭和四二年度」参考  
私立高校の一、二七六名で、  
たりの平均在籍数は一、二六六名で  
低い学校は淘汰を余儀なくされる  
と考えるべきであろう。

現在、国・公立高等学校の一所当たりの平均在籍数は一、二六六名で  
あるが、社会的に存在意義

結論をいえば、社会的に存在意義

の低い学校は淘汰を余儀なくされる

差を四五五年までに一四万三四八名も減ると言うことは私立学校にとつてどういうことを意味するのであろうか。

い。

それでは四五五年までに一四万三四八名も減ると言うことは私立学校にとつてどういうことを意味するのであろうか。

名私立校への集中度を高め、その格差を一層助長するに至つてゐる。

こうした現状の中で、四三年度の生徒募集は進められたが、今年はさくらんぼ定員五〇〇名を採用することができた。

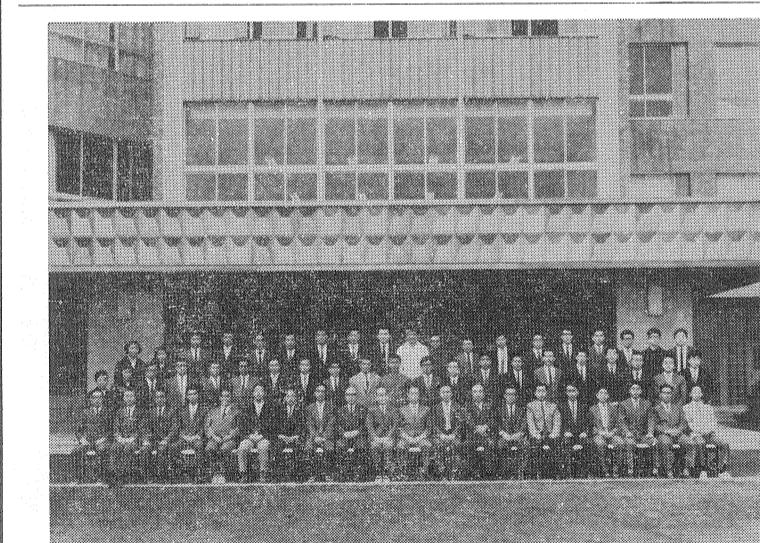
このことは、大学の付属といふ慣習された条件と、教職員の熱心な努力と、大方の厚意に基因しているが、今後ともこの定員を確保維持していくためには、社会の要請に応えうる目

的性を確立していくことが必要である。大学付属としての本校、宗立学校としての本校、そこには創設時の不動の教育理念や精神があるが、それを現代に調和させることも必要である。高等学校に求められる事柄の本質を究明し、その要求に応える体制を独自の建学理念によつてそれを現代に調和させることも必要である。

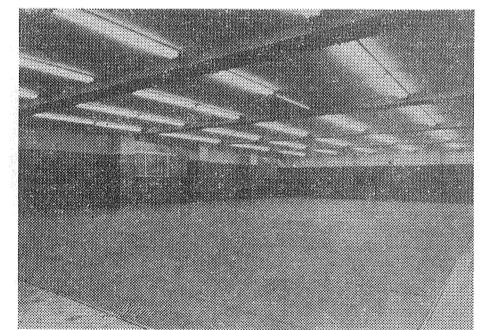
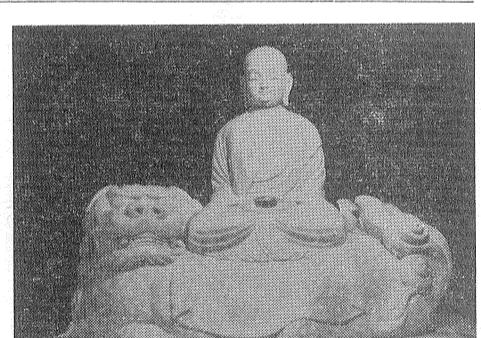
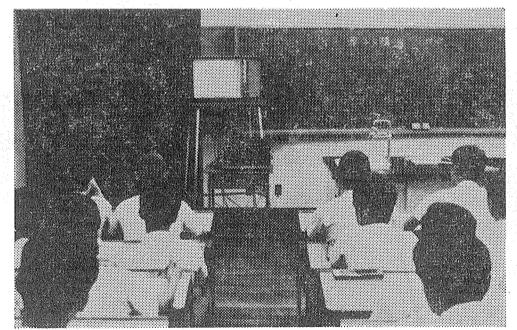
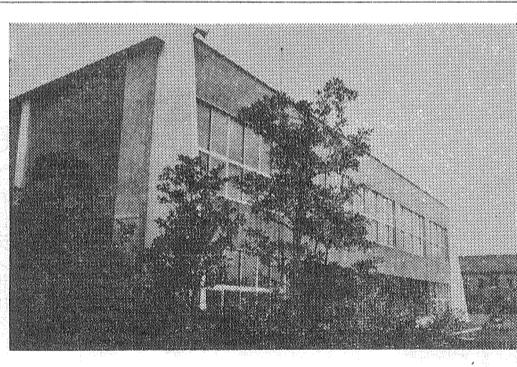
たためには、社会の要請に応えうる目

的性を確立していくことが必要である。大学付属としての本校、宗立学校としての本校、そこには創設時の不動の教育理念や精神があるが、それを現代に調和させることも必要である。高等学校に求められる事柄の本質を究明し、その要求に応える体制を独自の建学理念によつてそれを現代に調和させることも必要である。

しかし同窓生の果たす眞の役割は、ただそうした物質的な援助にとどまるものではなく、本校の建学精神を遺憾なく社会生活において發揮されることにあるのだろうと思う。



右上、駒大高全景  
右側手前の建物  
は講堂兼体育館  
中右、坐禅堂に安置する文殊菩薩  
中左、講堂兼体育馆全景  
下右、柔剣道場内  
下左、ビデオテープによる授業風景  
上、現教職員



## クラス会報告

四十三年度のクラス会は現在のところ次のように行なわれています。

五月 於大塚・十八期A組・池田忠夫先生  
三月 於渋谷・十七期三B・山田勲  
五月 於大塚・十八期A組・白浜正幸先生  
三月 於駒大高・十七期C組・白浜正幸先生  
五月 於三軒茶屋・十六期K組・田上太秀先生  
六月 於三軒茶屋・十八期C組・三木太郎先生

お知らせ

長らくお待たせした会員名簿を今秋皆様のお手許に届く様に、たいだい表示変更によって、学校保存の資料はほとんど役に立たなくなりましたので、できうる限り、新住所・勤務先(TEL)などを詳しく、名簿作成係に御連絡頂きたいのです。また貴方の同級生、先輩、後輩の方などの近況や移動についてご存知の点があれば、あわせてご一報頂きたくお願いいたします。

